

平和な島だった沖縄。しかし…

沖縄は、かつて琉球王国とよばれ、14～16世紀には、中国・日本・朝鮮をはじめ、遠くはインドネシアなど東南アジアの国々にまで船を出して、中継貿易で活躍しました。資源の少ない国でしたが、武器を持たない平和を愛する文化国家としてその名をとどろかせていました。



沖縄の夏には欠かせないエイサー

明治時代になると琉球王国は日本によって廃止され、武力によって沖縄県が設置されました。日本政府は、沖縄独自の文化を廃し、標準語の使用や創氏改名など日本への同化政策をすすめました。

それでも沖縄は長いあいだ平和のうちに生きてきました。が、沖縄戦でそれが一変。県民14万4千人（県民4人に1人）のいのちが奪われることになったのです。



小学校では方言をしゃべった子どもの首に「方言札」を付けさせた

方言を
しゃべっては
いけません。



中国との貿易で活躍した進貢船



万国津梁の鐘

15世紀につくられた首里城正殿で、「船を使って世界の架け橋となる」という意味の文字が刻まれている。文化国家・沖縄の象徴である。



沖縄戦で県民は「集団自害」に追い込まれた慶良間諸島での写真と思われる

「捨て石」にされた沖縄

天皇を守るために

沖縄戦が始まる約 2 カ月前の 1945 年 1 月 20 日、大本営陸海軍部は本土決戦準備を本格化させるため「帝国陸海軍作戦計画大綱」という作戦計画を決定しました。

ここでは、沖縄は「皇土防衛の為の前縁」つまり天皇の土地を守るための縁（ふち）として位置づけられ、上陸を許した場合はできるだけ敵の消耗をはかるという作戦が決定されました。大本営は、もともと沖縄の土地と県民を守り抜く意図はなかったのです。

「戦史叢書 沖縄方面陸軍作」(防衛庁編より)



1944 年 10 月 10 日の空襲当日の昼、料亭の女性たちと食事をする第 32 軍の首脳陣。

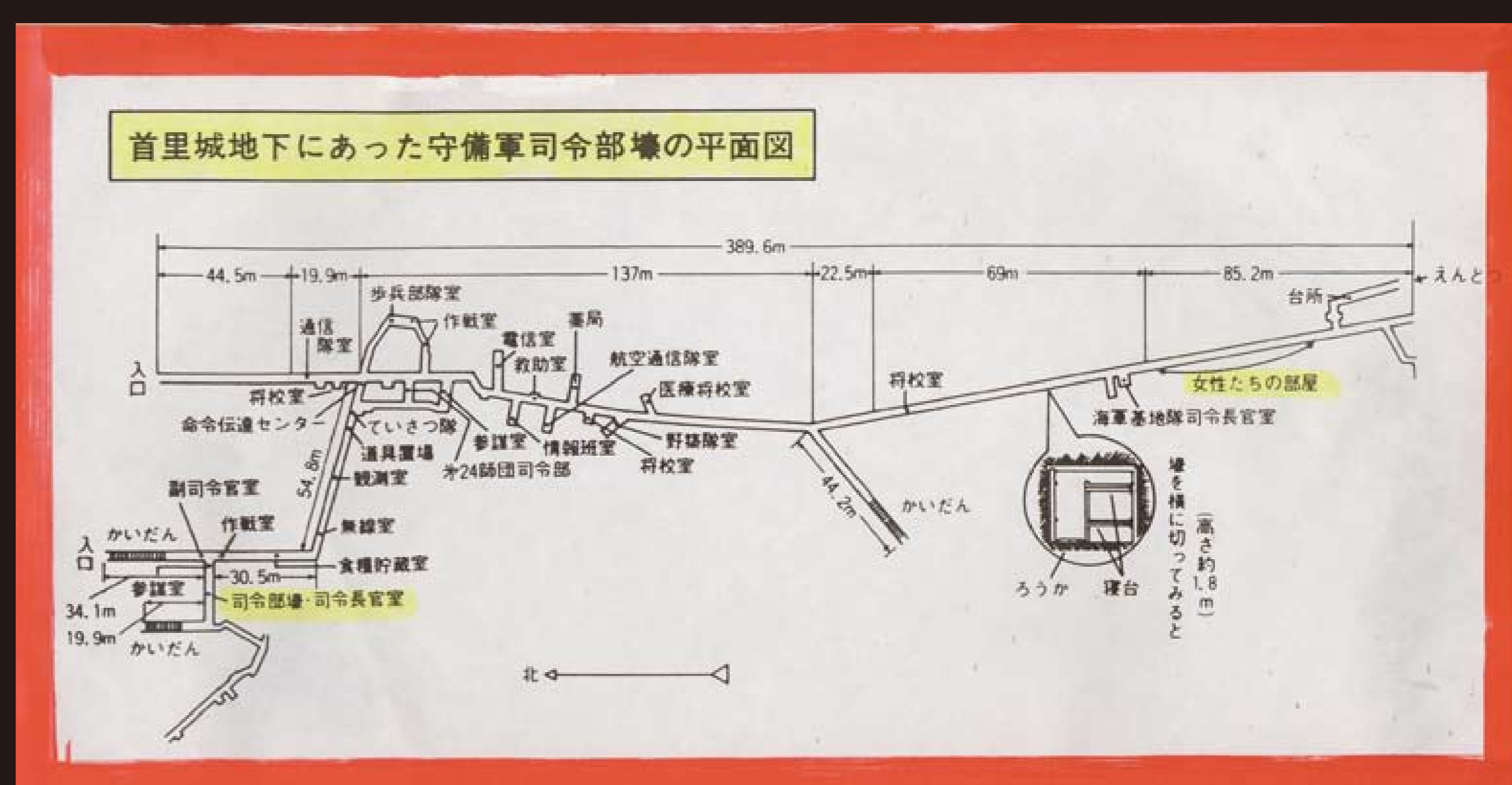
国体護持の時間かせぎに

沖縄戦が始まる 1 カ月前の 1945 年 2 月 14 日、昭和天皇の重臣で元首相の近衛文麿は、天皇に対してもはや敗戦必至の戦局のもとで、国体護持（天皇制をまもる）のためには早く降伏した方が得策であるとの上奏をおこないました。

しかし、昭和天皇は「もう一度戦果をあげてからでないと…」と、降伏よりも最後の決戦を求め、天皇制をまもるための有利な条件をつくることを求めたのでした。

こうしてみると、県民をはじめ膨大な犠牲者を出した沖縄戦とは、天皇制をまもるための時間かせぎの「捨て石」作戦だったと考えられます。

第 32 軍（沖縄守備軍）指令部壕の跡。この指令部は首里城の地下 30 メートルのところにつくられ、常時 1000 名の将兵がいて、食糧や酒類も豊富でホテルのようだったといえます。第 32 軍は米軍の消耗をはかるため、長期持久戦の戦略でのぞみました。そのため、沖縄各地の自然洞窟を利用して、指令部壕をはじめ多くの地下陣地を構築しました。



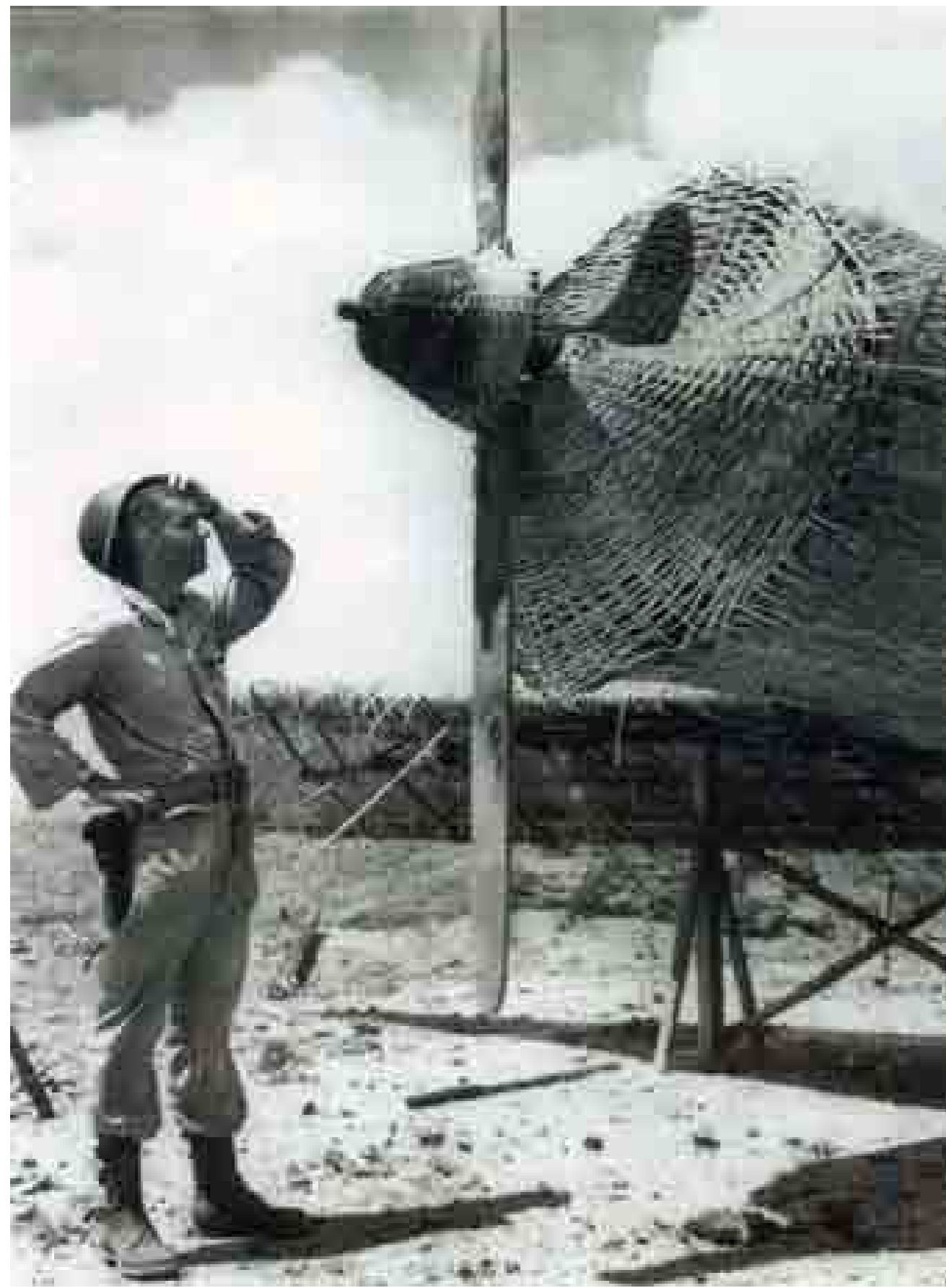
沖縄戦の戦闘経過



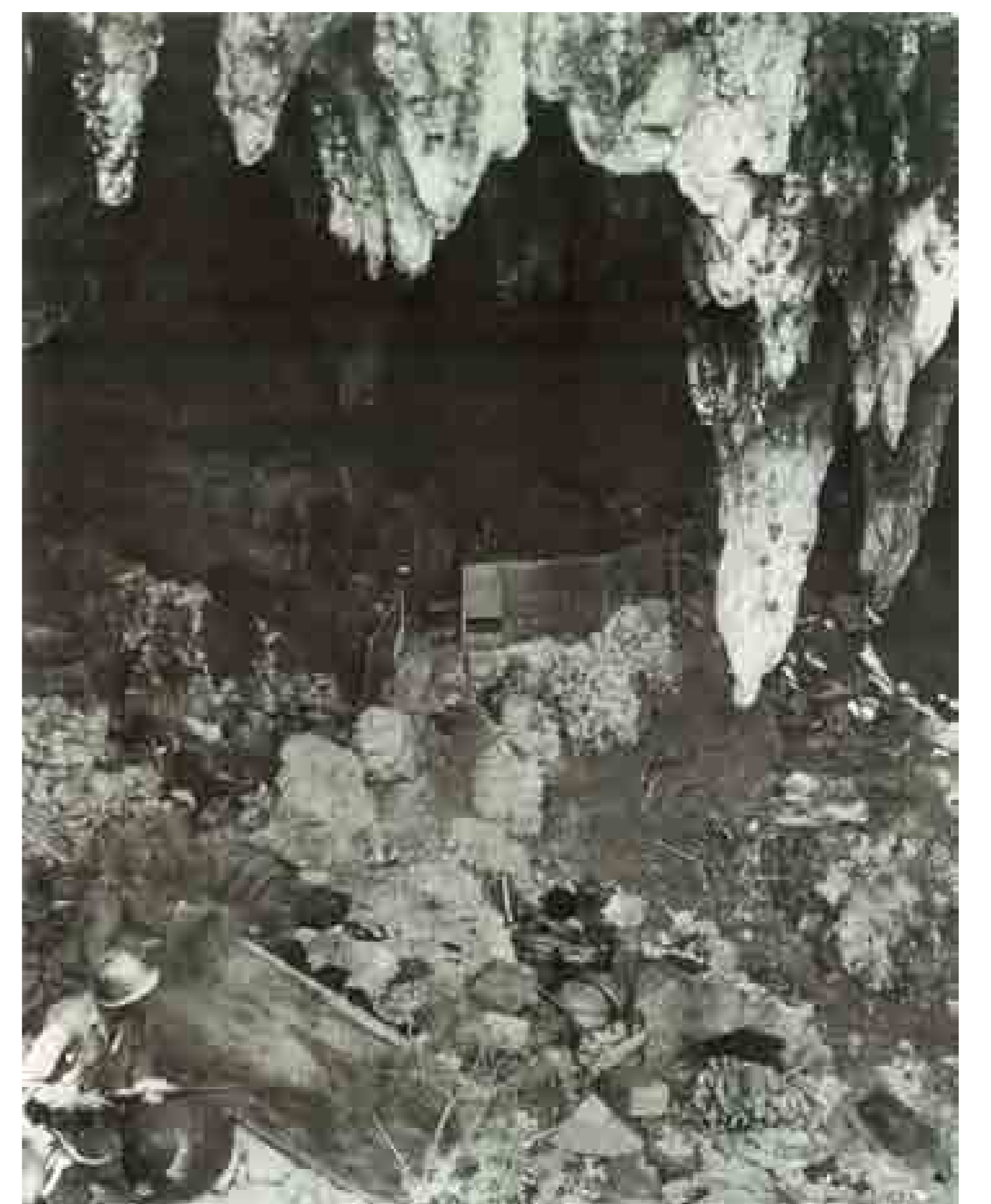
54万 8000人
うち陸上戦力 183,000人

VS

10万 2000人
うち防衛隊・学徒隊 25,000人



日本軍のオトリの飛行機にあきれる米兵



日本軍や住民がたてこもっていたガマ



火炎放射器を使って攻撃する米軍



3/26
慶良間諸島

6/10
6/18
第3外科壕
(ひめゆりの塔)

6/21 摩文仁

4/1
陽動作戦

5/6
5/21
5/31

4/7

4/3

4/2

4/1

4/8

4/5

4/4

4/7

4/6

4/17

4/11

4/13

4/19

4/16~20

伊江島

伊江島

伊江島

伊江島

伊江島

伊江島

伊江島

伊江島

伊江島

伊江島

鉄の暴風



米軍によるすさまじい艦砲射撃



無数の砲弾の跡

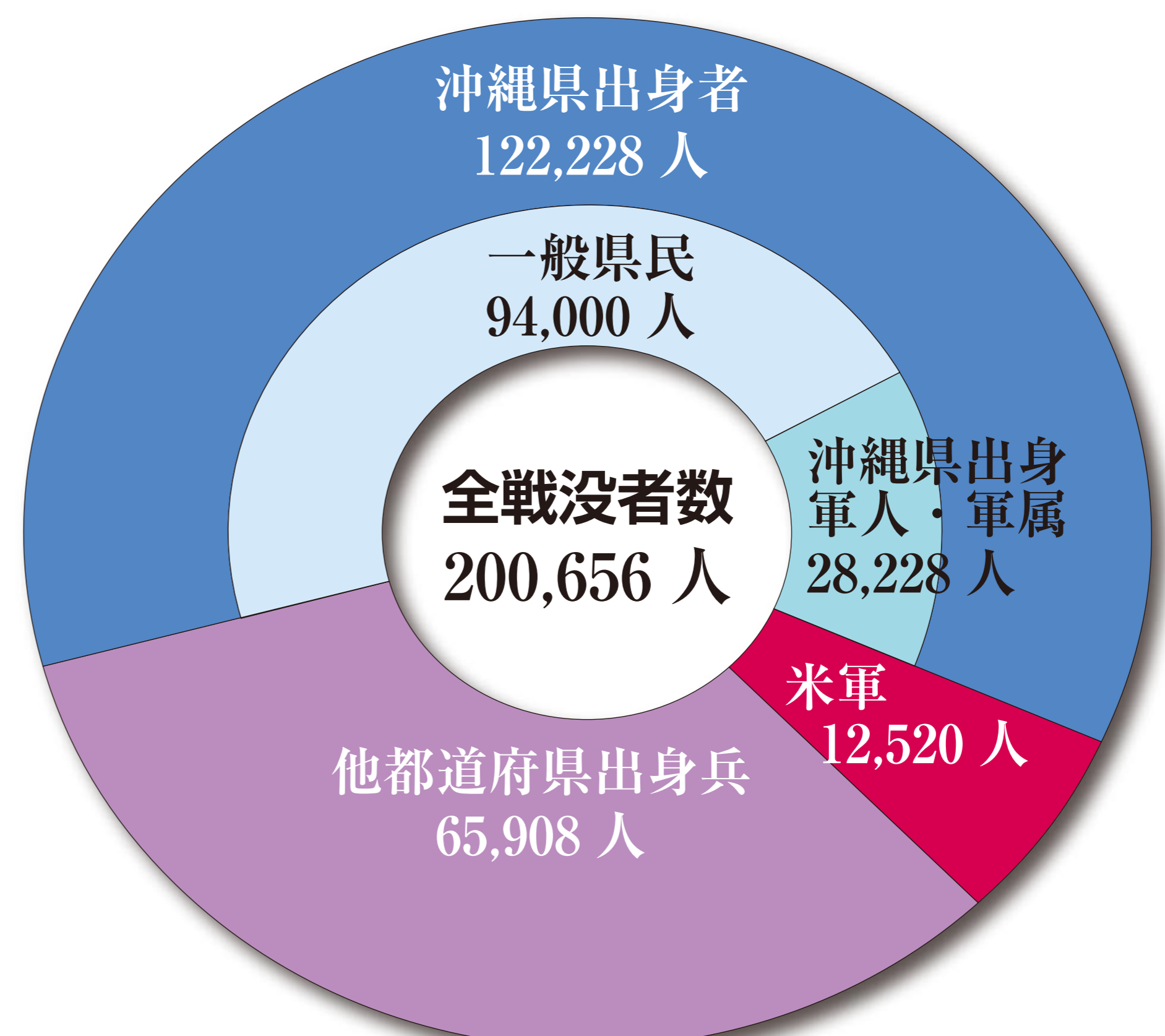
沖縄戦に米軍は約 55 万の兵員を動員しました。対する日本軍は約 10 万で、弾薬・食糧なども少なく、勝算のない戦いでしたが、本土決戦の時間稼ぎのため、約 3 か月にわたる持久戦が行われました。いわゆる「捨て石」作戦です。

米軍は 3 月 26 日に慶良間諸島を占領し、ついで 4 月 1 日に沖縄本島中部に上陸し、本島北部は 2 週間で占領。しかし嘉数高台や前田高地などに防衛ラインを敷いていた日本軍と約 1 か月間、激しい戦闘が続けられました。豊 1 条に 10 発の弾が落ちたという「鉄の暴風」です。この戦いで日本軍は 85% 以上の兵力を失い、5 月には司令部のあった首里城が陥落。にもかかわらず日本軍は降伏せず本島最南端まで撤退しながら 6 月下旬まで戦闘を続けました。軍とともに南部へ避難した多くの住民は激しい地上戦に巻き込まれ犠牲となりました。沖縄戦全体での住民の犠牲は約 9 万 4000 人以上。兵士よりも住民の犠牲が大きかったことが沖縄戦の特徴の一つです。

沖縄戦で使用された銃砲弾（米国防総省調べ）

種類	発射総数
艦砲弾（海軍）	600,018発（約20万トン）
155ミリ砲（陸軍） 各種曲射砲（同）	209,512発 4,196,362発
携銃弾（陸軍）	29,810,953発
手榴弾	392,404発

沖縄戦戦没者総数の推計



沖縄県援護課資料より
（イギリス兵・朝鮮半島出身者・台湾出身者は含まれておりません）

根こそぎ動員

戦闘指針

撃敵合言葉

一機一戦艦

一艇一船

一人十殺一戦車

アジア太平洋戦争末期、米軍は南方から日本に迫ってきました。日本軍は、1944年から沖縄に守備軍を置き、「一木一草に至るまで戦力化」の方針のもと、沖縄住民から物資や土地を徴発し、飛行場建設などをすすめました。

1945年2月、戦争終結を提案する近衛文麿元首相に対し、昭和天皇は「もう一度戦果を上げてから」と却下し、沖縄戦に期待しました。

沖縄では「軍官民共生共死」「根こそぎ動員」の名の下に、満17～45歳までの男子は防衛隊として臨時召集され、米軍の上陸が迫ると令状なしに女性や子どもたちも義勇隊として各町村ごとに編成されていきました。

各地に駐屯した部隊には慰安所が置かれました。「慰安婦」の多くは朝鮮から強制的に送られてきた女性たちでした。



沖縄戦で捕虜となった防衛隊員と義勇隊員



戦場にかりだされた学生たち

師範学校や中等学校、青年学校などの男子学生たちは、鉄血勤皇隊や義勇隊・護郷隊として戦場にかり出され、1856人中983人が死亡しました。伝令や通信、歩哨、運搬、戦闘（爆弾を背負って米軍戦車へ体当たりするなど）を行いました。護郷隊は陸軍中野学校（スパイ養成学校）出身の将校が指導し、本島北部でゲリラ戦を展開しました。



ひめゆり学徒隊の与那覇百子さん（現在、桶川市在住）

一方、師範学校や高等女学校の15～21歳の女子学生たちは、従軍看護婦として戦場に。看護の他にも死体埋葬や伝令なども行いました。学校ごとにひめゆり・白梅・なごらん・積徳・瑞泉・でいごなどの学徒隊に編成され、405人中191人が死亡しました。

そのうちひめゆり学徒隊は激戦が続いていた6月18日に解散したため、犠牲者123人中108人がこの後の数日で命を落としました。解散が26日と遅かった積徳学徒隊は3人の犠牲者でした。

また、戦場で赤十字や白旗を掲げていれば生き延びることができたのに許されませんでした。

多くの教師が、軍命に従い戦場に教え子を送ってしまいましたが、なかには県立農林学校の引率教師のように、銃殺覚悟で生徒を家に帰した教師もいました。

戦争マラリア…もう一つの沖縄戦

沖縄戦の開始後、八重山諸島の住人が石垣島、西表島のマラリア汚染地区（当時）に強制疎開させられ、3674人もの人々がマラリアにより死亡しました。

疎開者 3万 2000人のうち半数が感染、3600人余が死亡しました。マラリアはハマダラ蚊により感染され、伝染力も強く、ひどい寒気と身ぶるい、40度以上の高熱を出し、衰弱して死に至るといふ病気。その爆発的な発病と死は、疎開地での不安定な生活と帰島後の栄養不足、マラリア予防の無知・無策、医療施設・薬のないことなどが原因とされています。

沖縄戦とマラリアをつなぐ



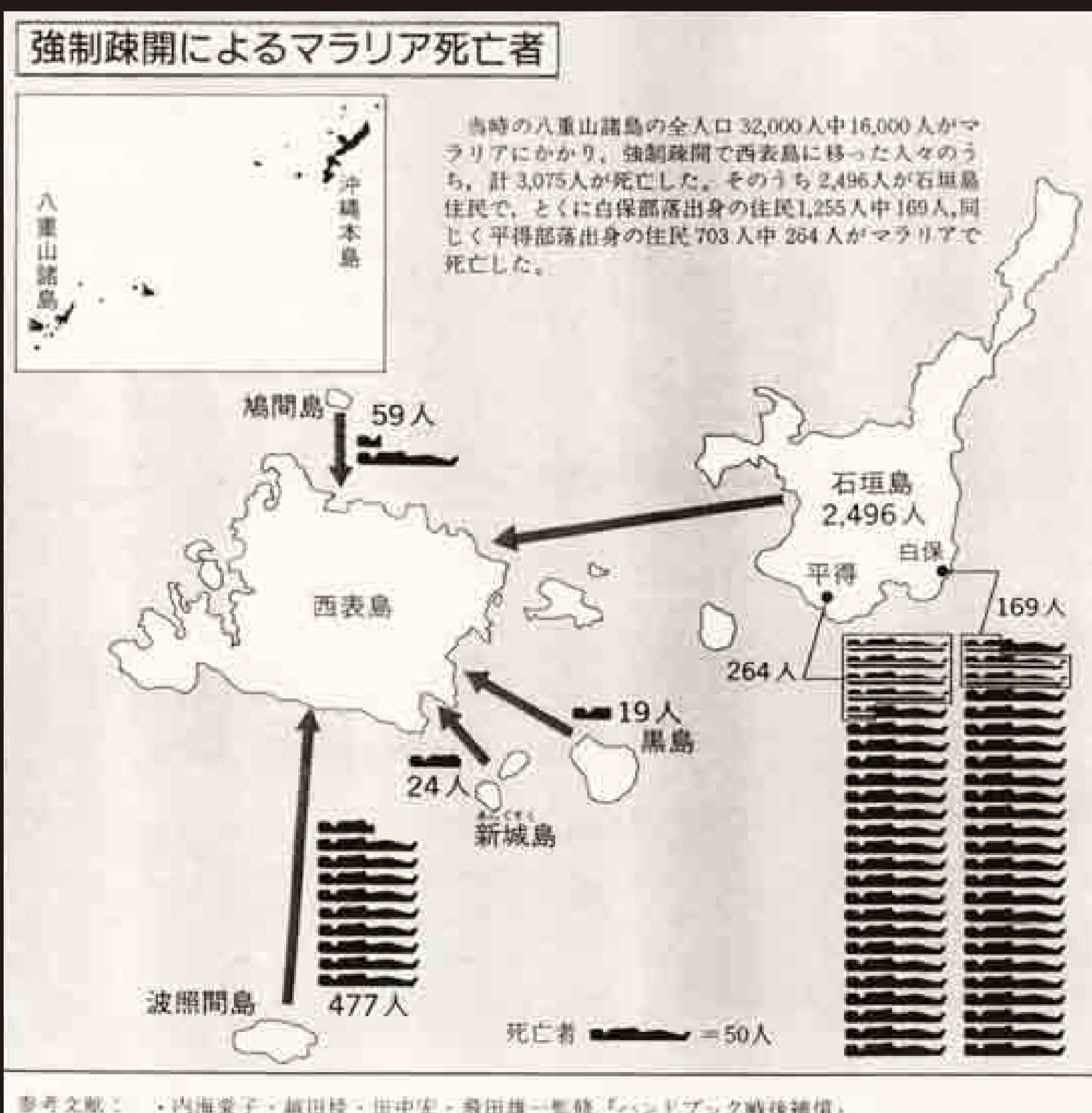
マラリアを治療する
(1945年与那国島)

強制疎開さえなければ、爆発的なマラリアの流行と大量死はありえませんでした。疎開は沖縄戦開始直後の4月からはじまり、敗戦の8月までつづきました。

この疎開は軍の命令を出す立場になかったが、旅団（石垣島独立混成第45旅団）の指示もあって疎開をすすめた。島民の意見がまとまらないので、軍刀を抜いて威嚇したこともある」(波照間島配置の元軍曹)

「この島に米軍が上陸したら、(旅団が)石垣島から砲撃する。避難しないで死んでもしらんぞ、と勧告を受けた」(黒島配置の元軍曹) (『毎日新聞』1993年5月16日)

遺族らは国へ補償を求めています。



「忘勿石」の碑

この碑は西表島の南東、南風見田（ハエミダ）海岸の岩場の一角にあります。ここからは遠くに波照間（ハテルマ）が望め、島民が強制疎開の場所として選んだところ。波照間島の場合、島民1590人のうちマラリア患者1587人、死亡したのは477人です。碑はこの「生き地獄」の経験を後世に伝えるためにつくられました。



明暗をわけた 2 つのガマ

チビチリガマとシムクガマ

1945年4月1日、米軍は読谷村に上陸。チビリガマに避難した住民約140人のうち83人が「集団自決」によってなくなりました。「米兵は鬼のように残虐である」と教えられていたため、自ら命を絶つことを選んでしまったのです。

一方、同じ村内のシムクガマに避難した約1000人は、ハワイ移民返りの2人の住民の「白旗を上げて降伏すれば殺されない」という説得で、全員が投降して「集団自決」は起こりませんでした。

2つのガマはたった1キロしか離れていませんでしたが、ジュネーブ条約を知っていたかどうかが大きく明暗をわけたのです。



チビチリガマ



シムクガマ

0~9歳	26人
10~12歳	15人
13~15歳	6人
16~18歳	3人
19~49歳	19人
50歳	12人
年齢不詳	1人

チビチリガマで亡くなった人の大多数は、衣類や布団を焼いた煙による窒息死でしたが、なかには愛する我が子を敵の手に渡すまいと母親がカマでその子の首を切り裂いたり、看護婦が毒薬を身内に注射したりしたケースもありました。

チビチリガマで亡くなった83人中、18歳以下の子どもたちは50人にのぼり、19歳以上の大人31人中女性が25人にのぼりました。こどもと女性の犠牲者が多かったのです。

日本軍に強要された「集団自決」

沖縄県民は、日本軍によって「軍民共生共死」のスローガンの下、根こそぎ動員され、戦場で捕虜になることを禁じられていました。また米軍に捕まれば「男は戦車に轢かれ、女は強姦される」と教えられました。

日本軍による住民の壕からの追い出しや食糧略奪、スパイ容疑による処刑など直接・間接の住民殺害も相次いでいました。

そんな逃げ場のない極限状態の中、軍や役場などの公的機関による「自決」の命令や誘導、「自決」用の手榴弾の配布があり、住民は「集団自決」（強制集団死）に追い込まれていったのです。「集団自決」（強制集団死）は、軍の関与なしには起こりえない現象です。



「白梅の碑・野戦病院編」新里堅進 出版：クリエイティブ21

2006年度の教科書検定で、文科省は、沖縄の「集団自決」について軍が関与していたという記述を一切排除するように求めました。

結果、教科書の記述は、軍の強制や誘導はなく沖縄の住民が潔く自決したように読み取れる内容になってしまいました。

これに対して、沖縄県内では「沖縄戦の実相を歪める」との批判の声があがり、県議会はもちろん、全ての市町村議会で党派をこえて、教科書検定の見直しを求める決議があげられています。

壕では、赤ちゃんの泣き声がもれぬように命じられ、固く抱きしめて窒息死させてしまった母親たちもいた



「集団自決」の「軍命を受けた」との証言や、沖縄県議会が全会一致で検定意見の撤回と「集団自決」の記述回復を求める意見書を採択したことを報道（2007年7月6日付沖縄タイムス）

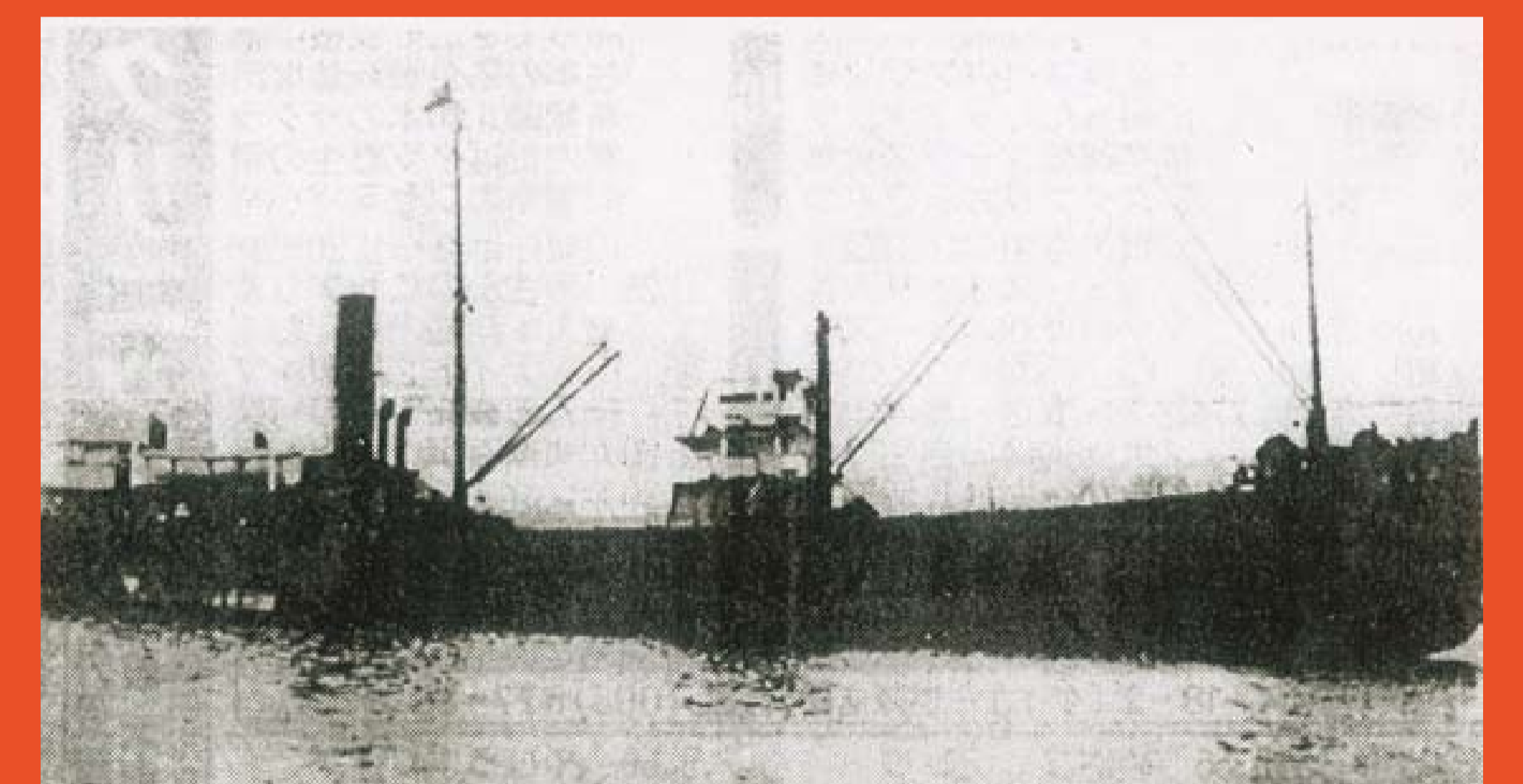
学童疎開船「対馬丸」の悲劇

800 人の子どもを含む 1700 人を乗せた学童疎開船「対馬丸」は、1944 年 8 月 21 日に、護衛艦など 5 隻で長崎をめざし沖縄・那覇を出発しました。

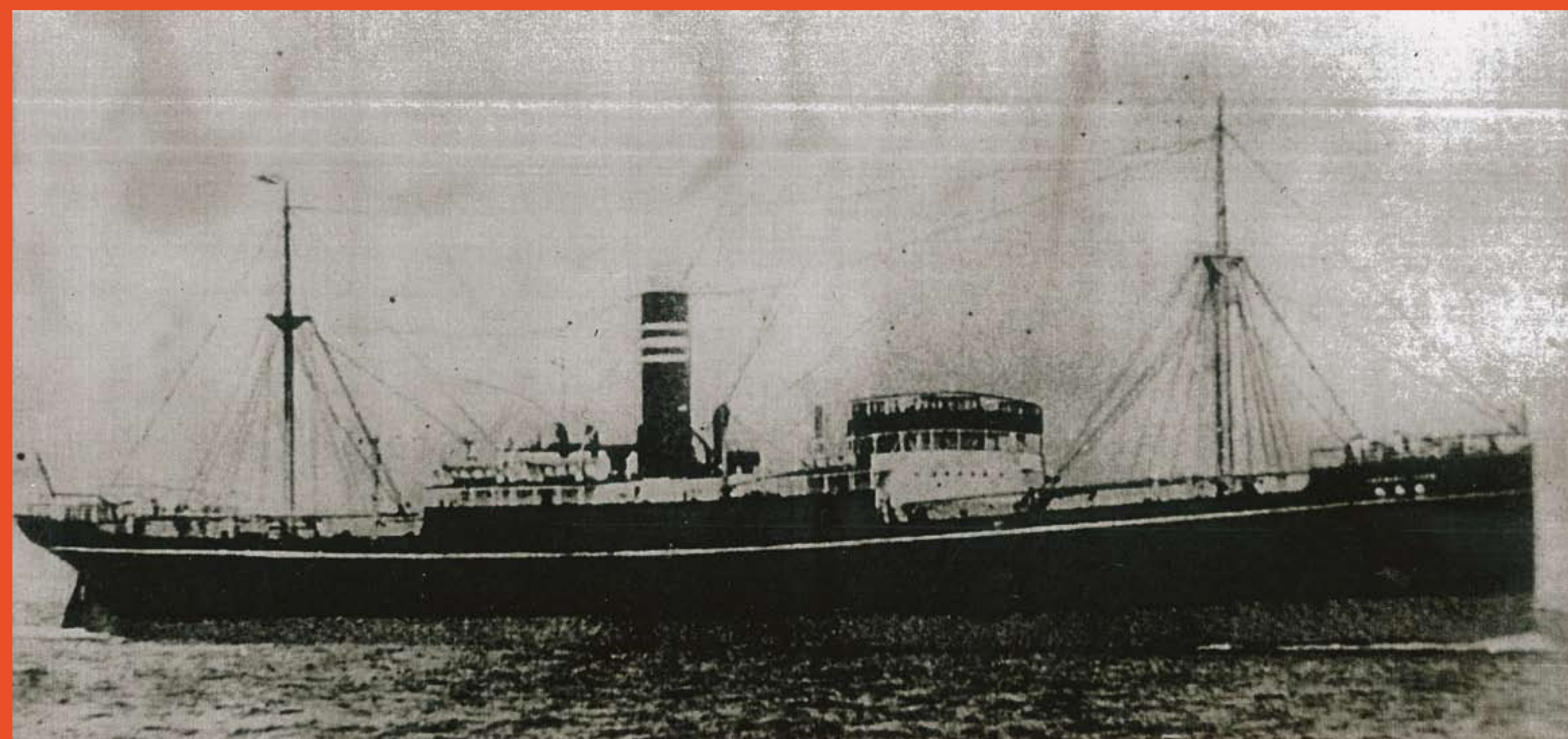
22 日、トカラ列島の悪石島付近で米軍潜水艦と遭遇。ジグザグ航行でのがれようとしたが、老朽船のため船足が遅く、魚雷 3 発を受けて、またたく間に沈没してしまいました。護衛艦は遭難者を置き去りにして逃げてしまいました。1500 人が犠牲になりました。

しかし、この事実は敗戦まで「軍事機密にかかわる」として極秘にさせられました。

『対馬丸』のたどった航路



もう一つの悲劇「武州丸」



もともと「対馬丸」は中国大陸や南方へ兵員や物資を運んでいました



870 メートルの深海に沈む「対馬丸」

「対馬丸」以外にも学童疎開船の悲劇がありました。1944 年 9 月、徳之島から九州をめざした「武州丸」は 148 人の子どもたちとともに撃沈されました。「対馬丸」と異なり、いまだにっさいの補償はおこなわれていません。

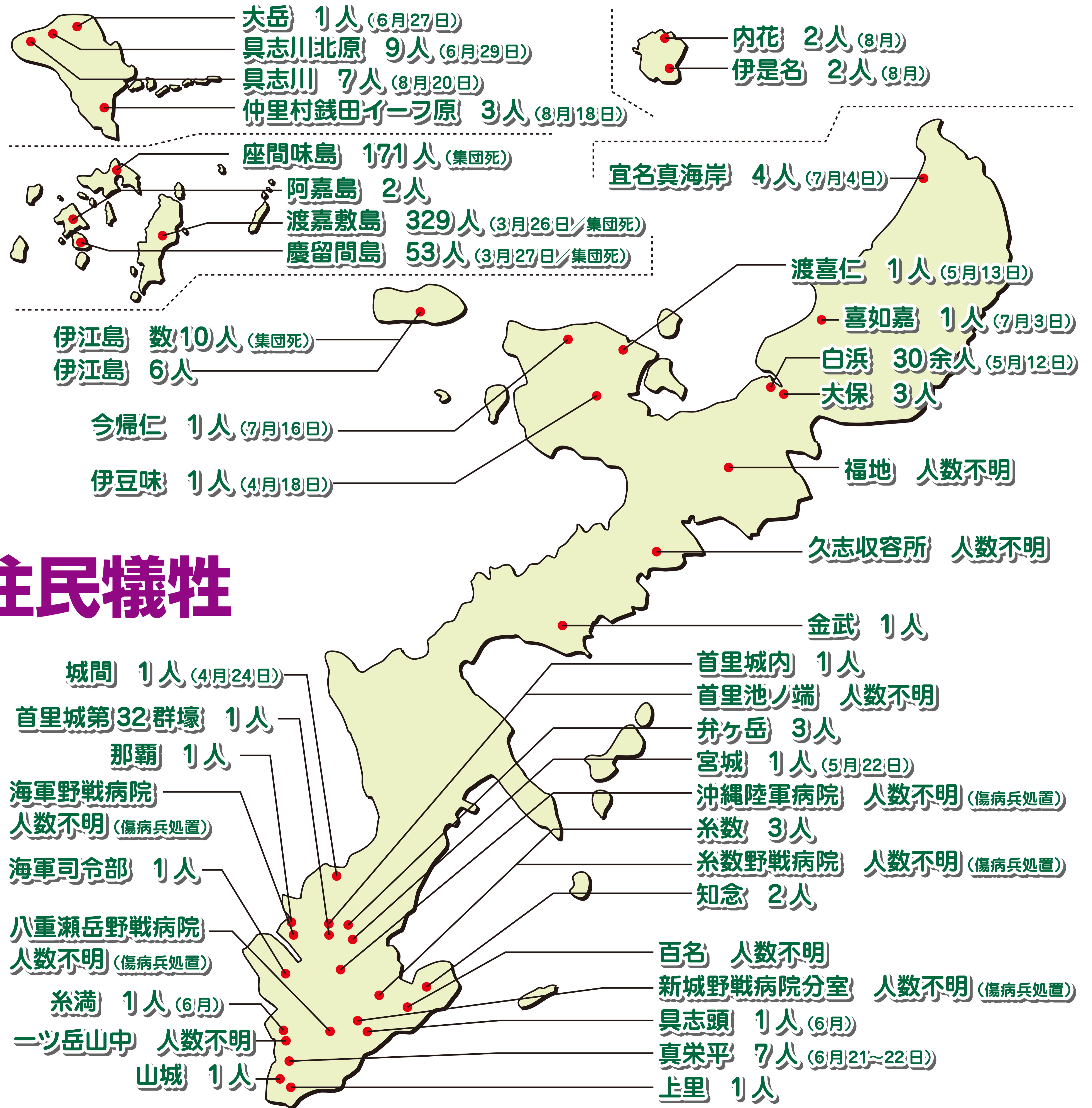
沖縄県民は、日本軍によって「軍官民共生共死」のスローガンのもと動員され、戦場で捕虜になることを禁じられていました。また米軍に捕まれば「男は戦車に轢かれ、女は強姦される」と教えられていました。日本軍による住民の壕からの追い出しや食糧略奪、スパイ容疑による処刑など直接・間接の住民殺害も相次いでいました。そんな逃げ場のない極限状態の中、軍や役場・学校などの公的機関による「自決」の口頭による命令や誘導、手榴弾の配布があり、住民は「集団自決」(強制集団死)に追い込まれていったのです。軍が駐留して

日本軍による住民犠牲

いなかった場所では、このようなことは起こりませんでした。軍の強要なしに「集団自決」は起こりえない現象です。



日本軍は沖縄方言を話す者は間諜(スパイ)とみなし処分する命令を出していた



「歴史を歪めないで」

2005年、大江健三郎の著書「沖縄ノート」の記述に対して「集団自決についての軍命はなかった」と訴える元軍人が裁判を起こしました。文科省はこの裁判を理由に判決も出ていないうちから、日本史教科書の「集団自決」について「軍の関与・強制」という記述を削除する検定をおこないました。

2007年、沖縄県内ではこの検定に対して「沖縄戦の実相を歪める」との批判の声があがり、同年9月には約11万人を集める大集会が開催されました。同年12月、批判の声をうけて文科省は教科書の記述の一部修正を認め、「軍の関与」についての記述は復活しました。しかし「軍の強制」については未だ認めておらず、沖縄では今も運動は続いています。

上記の裁判は2011年4月21日、最高裁が上告を棄却し大江側の勝訴が確定し、元軍人らの訴えは退けられました。



(上) 11万人集会

(中) 「集団自決」と思われる

(下) 平和の礎 (いしじ)。沖縄戦で亡くなった方々のお名前を、国籍や軍人・非軍人を問わず、すべて刻んでいます。埼玉県出身の犠牲者のお名前も、1114人刻まれています(2001年6月23日現在)。



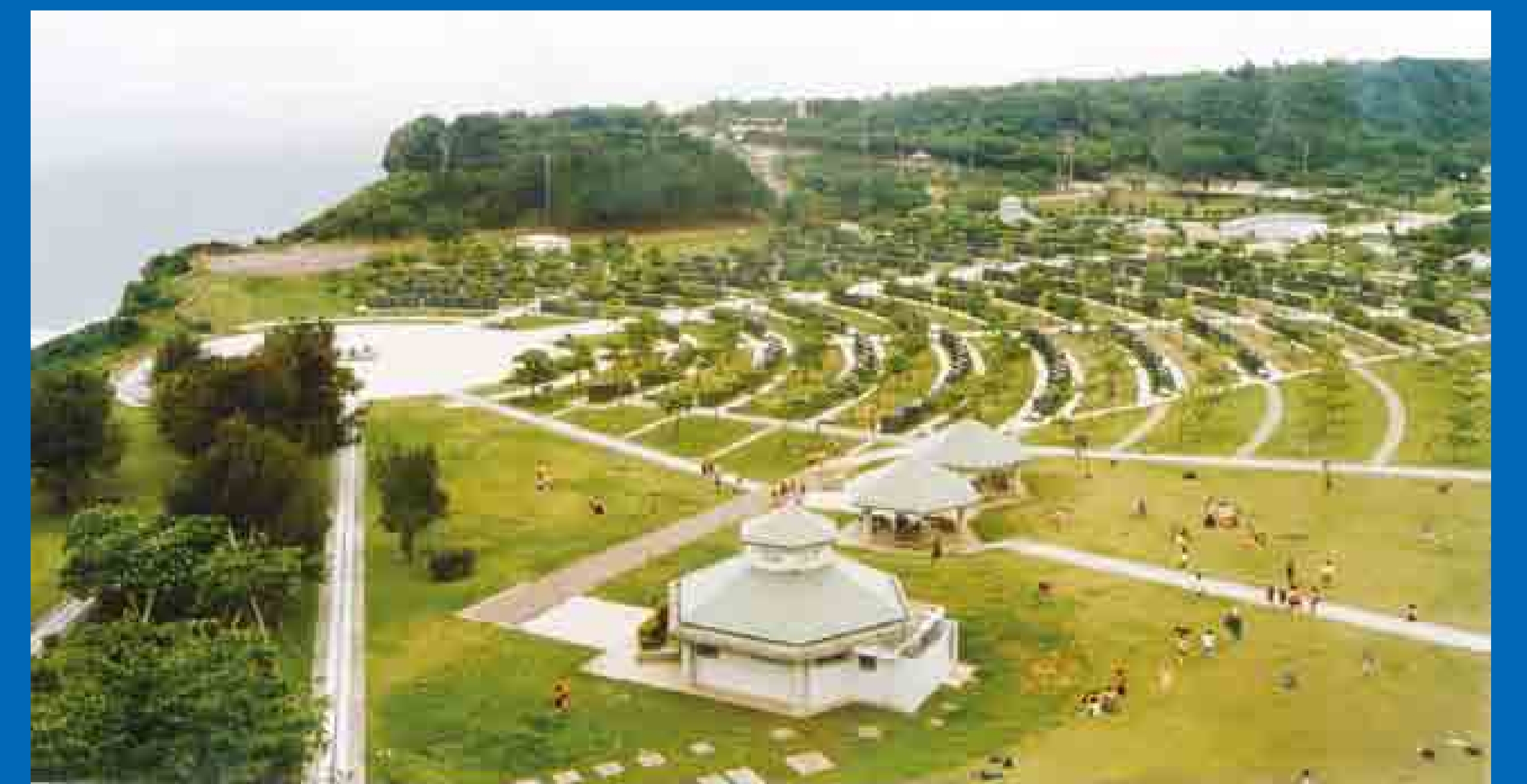
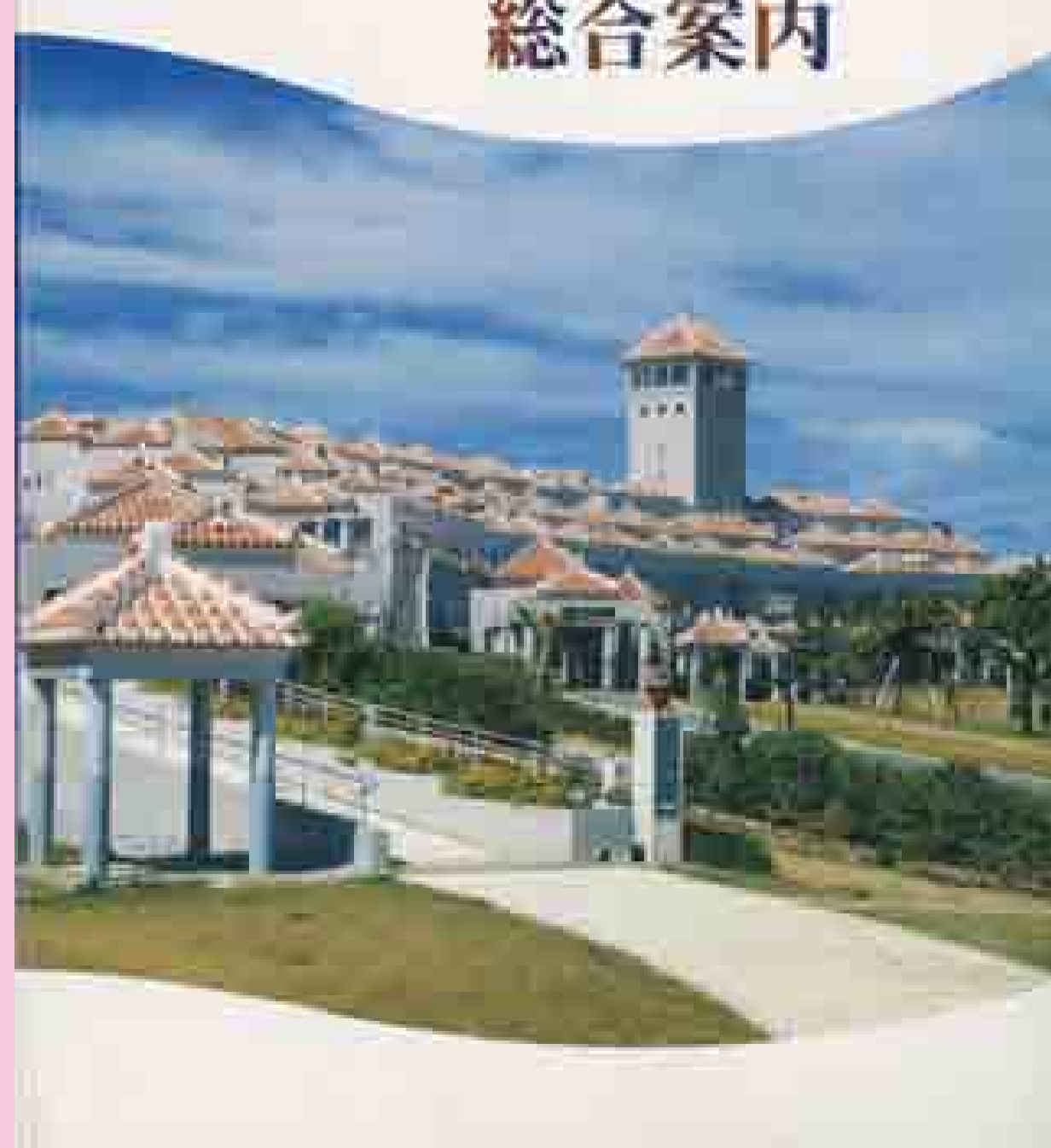
沖縄戦を語るガマの遺品遺物

沖縄戦当時、多くの住民が沖縄の自然鍾乳洞のガマに避難しました。南風原文化センターは、南風原陸軍病院壕（ひめゆり学徒隊が最初に看護にあたった場所）の跡地に立つ資料館です。また沖縄県平和祈念資料館は、最後の激戦地だった摩文仁の丘に立つ資料館です。どちらも沖縄南部のガマから収集した遺品や遺物を管理し、平和学習に活用しています。

(写真) 沖縄県平和祈念資料館

沖縄県平和祈念資料館

総合案内



多くの韓国人・朝鮮人も犠牲になった

「従軍慰安婦」

「従軍慰安婦」とは、戦場において強制的に日本軍兵士の性の奴隷にさせられた女性のことである。1944年3月に、第32軍（沖縄守備軍）が創設されると、沖縄県各地に「慰安所」が設置された。直接的には、日本軍兵士による沖縄県女性への強姦が頻発し、それを防ぐ目的で設置されたものだった。調査によれば、沖縄本島や周辺の島々に約130カ所の「慰安所」があったことが明らかにされている。そこでは、およそ1,600人の「慰安婦たちが、日本軍兵士に性的奉仕をさせられていたという。その多くが、朝鮮半島からなかば強制的に連れてこられた朝鮮人女性たちであった。沖縄戦が始まると、彼女らの多くは戦場に放置され、戦火の犠牲となった。

朝鮮人軍夫

沖縄には約6000人の朝鮮人が、日本軍の作業要員としてつれてこられた。かれらは、飛行場の建設、陣地・壕の、構築、軍事物資の荷役や運搬などに酷使された。また、米軍との戦闘が始まると、前線への弾薬や食料の運搬などもっとも危険な仕事をさせられ、多くの犠牲者をだした。また、逃げようとしたとか、食糧を盗んだとか、ささいな理由で日本軍によって虐殺された人々もいた。

主な「慰安所」の場所



朝鮮人慰霊碑

摩文仁の丘の各府県の慰霊塔とは、少し離れた所に丸い石塚の韓国人沖縄戦没者慰霊塔がある。碑文には、つぎのように刻まれている。「1941年太平洋戦争が勃発するや多くの韓国青年達は日本の強制的徴集により大陸や南洋の各戦線に配置された。この沖縄の地にも徴兵・徴用として動員された一万余名があらゆる艱難を強いられたあげく、あるいは戦死あるいは虐殺されるなど惜しくも犠牲になった。祖国に帰り得ざるこれらの冤魂は、波高きこの地の虚空にさまよいながら雨になって降り、風となって吹くであろう。(以下略)」この碑には「一万余名」の人々が犠牲になったと記されているが、正確な数はいまだ分かっていない。

「命どう宝」—平和世へ

第二次世界大戦で沖縄は、日本で唯一、戦場となり、当時の県民の4人中1人に当たる14万4千人以上の命が奪われました。

戦火をくぐりぬけ、生きながらえた人々は、「命どう宝」（ヌチドゥタカラ：命こそ宝）であることを学び、敵味方の別なく人々が相互に助けあうことの大切を学びました。

その精神が、沖縄戦で亡くなった人々の名前を、敵味方を問わず刻んだ「平和の礎」に現れています。



(左) 平和記念公園内に設置された「平和の礎 (いしじ)」
 (右上) ひめゆりの塔
 (右下) 健児の塔
 (下) 沖縄県平和祈念資料館

